

『小右記』に記された託宣者たち

— 女性への特化と「ミコ女性論」 —

堀 岡 喜美子

〔抄 録〕

日本の歴史上、神仏や霊との意思伝達者（託宣者）はミコと称されその多くが女性である。柳田國男はその理由を古代からの「女性の特性」にあると説いている（「ミコ女性論」）。しかし、古代からの史料を概観すると、女性が「託宣者」として「特化」するのは摂関期であると推定される。摂関政治隆盛期の公卿藤原実資の日記『小右記』に記された託宣者を検証したところ、その特性は女性による直接言語によるものと判明した。なぜ、摂関期に

託宣者が女性に特化されたのか、当時の貴族女性が置かれた状況を社会史、精神医学から検証した。結果、女性の苦難、葛藤からの脱却手段として現れる憑依現象が、託宣者として認識された可能性を導き出した。

キーワード 「ミコ女性論」、摂関政治、女性の苦悩、直接言語託宣者、憑依現象

はじめに

本稿は「巫女（ミコ）」の存立に関する史的研究の一環であり、日本のミコの圧倒的多数が女性であることに關して、説話集と『小右記』の記録、および精神医学より検証を試みるものである。

日本の中近世の史料を概観すると、神仏や霊との交信により託宣や口寄せを行う宗教者は「ミコ」と称され、その多くが女性である。現

在では、神社で若い女性が巫女として白い小袖と緋袴の姿でお守りなどを販売し、神事時には千早を纏い神楽を舞う存在として知られる。また、東北地方では「カミサマ」や「ゴミソ」などと呼ばれる神子が神事を取り仕切り、また、今日極めて少数になっているが、視力に障害のあるイタコと呼ばれる霊能者が亡き人の口寄せを行っている。こうした人々はほとんどが女性である。

一方、世界を見渡せば、M・エリアーデやI・M・ルイスは北東ア

ジアやアフリカ各地の調査から、シャーマンと呼ばれる霊界を自由に徘徊し、神霊を支配するとされる霊能者が多く存在することを明らかにしたが、彼らの大勢は男性である。^①日本のミコは、その機能や役割から考えるならば、厳密にはシャーマンとは言えないが、神霊との交流者として広義な解釈の範疇ではシャーマンと位置付けられよう。

柳田國男は日本の霊能者（ミコ）に女性が多いのは、女性の「特殊生理」や感じやすい「特性」からであるとし（本稿では、この論を仮に「ミコ女性論」とする）、ミコは古代より祭祀はもとより社会や家庭において重要な役割を果たしたと論じている。^②この論は、今日においても民俗学や文学などに、いわば「文化」として根強い影響を与えている。

「ミコ女性論」について、義江明子や溝口睦子は古代では霊能者は男女共に存在する事実から反論を呈している。^③また祭祀の役割などからの検討の重要性を提起し、「女性の特殊性」や「妹の力」からの解放の必要性を説いている。しかしながら、「ミコ女性論」が古代以降のミコの実態、すなわち中世における女性史・社会史全般からの検証が行われているとはいえず、いつ頃からなぜ女性が「ミコ」として「特化」するのかについては不明である。

本稿の目的は以上の問題意識より、史料から「ミコ女性論」を検証するものであるが、古代から中世への転換期の史料、すなわち六国史、説話集、貴族の日記類等を通覧したところ、十世紀から十一世紀の撰関期において「霊性」能力である託宣が女性によって際立つことを見出した。そして、撰関期の公卿藤原実資の日記『小右記』には、

十数件の直接言語による託宣に関する記事が記されているが、これら託宣者のすべてが女性であることが明らかになった。すなわち、撰関期において、なんらかの理由によって託宣者が女性に特化されたのではないか、と推測されるのである。こうした実態が「ミコ女性論」とどのような繋がりがあるのか、撰関期社会の社会状況、特に女性が置かれた実態を検証し、その上で精神医学からの検討を試みるものである。

なお、従来女性霊能者の表記は主に「巫女」、あるいは「神子」と表記することが「慣例」であるが、歴史史料に「巫女」が現出するのは十二世紀前半の神社巫女からであり（拙稿参照）、^④また「神子」が一般化するのには鎌倉時代以降と考えられる。したがって、「巫女」の前史を論ずる本稿では資料記録以外は原則として「ミコ」とする。

一章 古代から平安期における託宣者の変遷・推移

今章では、日本の歴史上においてミコの主たる職掌である託宣（口寄せ、託くなども含む）、すなわち神仏や御霊からの意思伝達が、男性より女性優位の状況がいつ頃かを検証する。時代の変化によりて託宣者が具体的にどのような変遷したかを検証する対象史料として、適切と思われる一つが「説話集」である。その理由として、①「六国史」およびその他の多くの史料すべての託宣者掌握は極めて困難であり見落とす可能性があるが、説話集では古代から中世の継続した情報を比較的簡簡に、かつ確実に得ることができる。②登場人物が男女を問わず、庶民から皇族・貴族と幅広い階層の人々を対象としている。

③当時の社会事象（政治・宗教など）だけではなく、過去の事象も対象として取り上げている、の三点が挙げられる。

鎌倉中期の代表的説話集『沙石集』では、託宣者はミコ・かむなぎとして女性に特化されており、鎌倉中期にはミコ＝女性とした認識が一般化したと考えられる。よって今章では、奈良時代から鎌倉時代初期の代表的な説話集から、託宣者がどのように変化したかを探る。

1 『日本国現報善惡靈異記』・『今昔物語集』

今節では、平安初期から平安中期に編まれた説話集からの検討を行う。

『日本国現報善惡靈異記』（以下、『靈異記』）は、平安初期に薬師寺の沙門（私度僧）景戒が撰述した仏教説話集で、上・中・下の三部からなり約一一六編の物語が綴られている。内容は奈良時代を背景としたものが多く、また、後に撰される『今昔物語集』などの原形となるものも多数含まれている。その中において次の三編に「卜者」が登場する。

① 中巻 第五話「漢神の崇二依り牛を殺して祭り、又放生の善を修して、現に善惡の報を得る縁」

この話の内容は聖武天皇時代に富者が、漢神の崇りのために牛を七年間毎年一頭ずつ殺し祭ったが、祭りを終えた途端に重症になり、あらゆる治療を行ったが改善しないため、「卜者」によるお祓いや祈禱を行ったが良くならず、富者はこれは牛を殺した所為であると思い、その後生き物を放生するようにし、その善によって地獄より生還し

た、というものである。

ここでの「卜者」は託宣ではなく、お祓いや祈禱を行う人物として登場している。

② 中巻 第十六話「布施せ不ると放生するとに依りて、現に善惡の報を得る縁」

この話の内容は前話と同様聖武天皇時に、富者の使用人が富者の言いつけを守らず、老婆への布施を怠ったが、牡蠣十個を放生した。使用人は山に薪を取りに行き木から落ち死んだが、「卜者」に乗り「わたしの体を焼かず七日間そのままにしておくこと」と述べ、そのままにしておいたところ生き返った。これも因果応報を説いたものである。

③ 下巻 第三十一話「女人、石を産生みて神とし齋ク縁」

これは桓武天皇の世に、独身の女性が男性と関係を持たずして懐妊し、二つの石を生み、近くの神が「卜者」に託いて「其の産める二つの石は、是れ我が子なり」といったという話である。この話は柳田國男が「玉依姫考」にも書いている。傍線は筆者による。

①と②はいずれも悪行を成しても、放生などの善行を行えば仏法によって救われるという仏教の因果応報を説いた話であり、③は地域神の石信仰縁起ではないかと思われる。

三話中での「卜者」の役割は、①ではお祓いや祈禱であり、②は死人が卜者に乗り移り死人の言葉を託し、③は神が卜者に乗り移り神の言葉を託している。お祓いや祈禱、および死人や神が乗り移って言葉を託す役割は巫（巫覡）と同様であり、ここでの「卜者」は巫と理解

されよう。なお、本稿での引用は、『日本古典文学大系 日本霊異記』（岩波書店、一九七六年十一刷版）からであり、ト者は「カミナギ」とふりがなが付けられている。

これらの物語から窺えるのは、奈良時代にはト者なる巫が、仏教、神道、あるいは他国の神や地域神など様々な宗教が混在する人々のかで活躍していることである。しかし、物語からはト者の性別を推し量ることはできない。

次に『今昔物語集』について、諸説はあるが平安中期の十二世紀、白河・鳥羽院政期頃に撰述されたとされる仏教説話集であり、作者は不明である。三十一巻、約一二〇〇編の物語から構成され、その内容は仏教に関するものから世俗的な内容と実に多岐にわたり、今日の文学にも大きな影響を与えている。このように多くの物語により編集されているが、明確に巫について書かれているものは一編のみであり、また、神や霊、その他狐などが乗り移り言葉を発するとした物語も数編にすぎず、「託宣」という語は見当たらない。

神やその他が乗り移った物語が次の三編である。

- ① 卷二十七第四十 狐人に託きて取られる
 - ② 卷二十三第十七 尾張国女伏す、美濃狐付き女
 - ③ 卷二十六第六 美作国神主に神付き
- 巫に関する物語が次である。

◎ 卷三十一第二十六 打臥御子巫語
今昔、打臥せノ御子ト云フ巫世ニ有ケリ。昔ヨリ賀茂ノ巫ト云フ事ハ不聞ヌニ、此レハ賀茂ノ若宮ノ託セ給フトゾ云ケル。「何ナ

レバ此ク打臥ノ御子トハ云フゾ」ト思ヘバ、打臥ノミ物ヲ云ケレバ、打臥ノ御子トハ云ケル也ケリ^⑤。

概要は、「今は昔、賀茂の若宮が託き、かつ打ち臥せて物言うので「打臥せの御子」と呼ばれる巫がいた。この巫の言うことは悉く当たり、藤原兼家もつねに召して、自らが正装し膝を枕にしお尋ねになった。云々」というものである。すなわちこの巫は賀茂の若宮の御子が憑き、打ち伏して物言うので「打臥せの御子」と言われ、『大鏡』兼家伝にも同様の話があるが、この巫の性別を表す記述は認められない。

以上、平安初期から平安中期を代表する説話集における託宣者について検討を加えたが、その特質は第一に、多くがト者・巫（かんなぎ）、憑き女、あるいは神職者の神主であり、その生業が呪術者として存立している。第二に、「憑き女」として女性を特定できる例は一件挙げられるが、他の件に関しては明確に性別を特定することができない、の二点である。

2 『古事談』・『続古事談』

『古事談』は鎌倉時代初期に源頭兼が編纂した説話集であり、六巻四六二話が収録されている。内容は『小右記』や『扶桑略記』などの先行文献からの引用も多いが、奈良時代から平安中期の貴族社会の知識故実や逸話などをまとめ、当時社会の人々の率直な意識状況を知ることができる。『続古事談』は作者不明であるが、『古事談』を踏襲した内容となっている。

『古事談』および『続古事談』の託宣話における託宣主、および託宣者（依代）は次のとおりである。

『古事談』^⑥

時代		託宣主	託宣者
①二話	長久元年（一〇四〇）	伊勢大神	斎宮
②十七話	不明	住吉大明神	不明
③二十八話	孝謙天皇時	長手大臣（死人）	傍らの人
④三十三話	平清盛時（一一四六）	奥院の阿闍梨	巫女
『続古事談』			
⑤一〇二	十一世紀中頃	不明	十歳計のむすめ
⑥一〇八	一条院時代	北野天神	典侍

3 『古今著文集』

『古今著聞集』（以下、『著聞集』とする）とは、鎌倉時代、下級官人であった橘成季が編著した世俗説話集であり、建長六年（一二五四）に成立したが、その後多くが増補されている。二十卷三十編七二六話からなり、『今昔物語集』に次ぐ多くの話を集め、その編集特性は、①説話の内容によって分類され、②すべての説話が事項の年代順に配列されていることにある。また、『江談抄』や『宇治拾遺物語』からの挿話があり、特に二年前に成立した『十訓抄』からの抄入は数多くみられる。

永積保明氏は『著聞集』について、成立時期は鎌倉前期ではあるが、説話の三分の二が平安時代の物語であり、貴族社会の様々な出来

事を集成し懷古思想に貫かれていると共に、先の年代順の配列は「事実にもとづいた説話の集成であるという自覚」とする思想によるものであると述べている。^⑦こうした『著聞集』の特長は、平安時代から鎌倉時代にかけての貴族社会の組織構造はもとより、意識や価値観の変化をリアルに看取できるものであり、託宣者の在り様の変遷も知り得る可能性を含んでいると考える。

『著聞集』中、「託宣」の行為が描かれた話は、第一の神祇第一の六話と、第二の釈教第二の二話であり、時代、託宣主、託宣者を表にすると次のようになる。^⑧

時代	託宣主	託宣者
第三話	延長八年（九三〇）	稻荷神
第四話	仁寿三年（八五三）	新羅明神
第五話	貞観期（八五九～七七）	住吉神
第九話	長暦二年（一〇三六）	伊勢大神
第十三話	保安二年（一一二一）	春日大明神
第二十話	永萬元年（一一六五）	春日若宮
第三十九話	弘仁五年（八一四）	大菩薩
第六十四話	建仁三年（一二〇三）	春日大明神

『著聞集』に記された託宣者を時代毎に見てみると、一つの特徴があることに気付く。第三話の仁寿三年（八五三）は和歌、第五話の貞観期は白髪のお翁、第三十九話の弘仁五年（八一四）は単に託宣人でありその性別は不明である。ところが第三話、延長八年（九三〇）は

小女、第九話、長暦二年（一〇三六）は斎宮の内侍、第十三話、保安二年（一一二一）は藤原忠實の北政所、第二十話、永寿元年（一一六五）は巫女、第六十四話、建仁三年（一二〇三）は高辯上人伯母と、十世紀に入り明らかに女性に特化される傾向が見られる。例題は少ないが『古事談』・『続古事談』においても同様の傾向が見られる。特に十一世紀に入り顕著となり、説話集には女性以外の託宣者の姿はほぼ見えなくなり、明らかに先に述べた奈良時代や平安初期における託宣者とは様相を異にしている。

こうした現象はなぜであろうか。十世紀に入り、女性を託宣者と特化する社会環境の変化やそうした必然性はあったのであろうか。あつたとするならば一体どのような変化であろうか。十世紀から十一世紀にかけての政治・社会の特徴の最たる変化は、藤原兼道から道長へと続く摂関政治の隆盛があり、この時代の政治・文化に大きな影響を与えていることである。

第二章 『小右記』に記された託宣者

『小右記』（天元五年（九八二）～長元五年（一〇三二）の部分が残存）とは、藤原道長・頼通による摂関政治全盛期の公卿、藤原実資が記した日記であるが、当時の政治、社会状況をはじめ、宮廷行事や儀式についての次第や有識故実についても詳述され貴重な歴史史料となっている。したがって、説話中の託宣者は事実を題材にした内容があるとは言え、あくまでも説話というフィクションの中での存在であるが、『小右記』の託宣者の姿は歴史的事象として捉えることができる。

1 託宣者の特徴

『小右記』および付随記録（『百鍊抄』）に記された託宣主、および託宣者は次の表のとおりである。なお、同時期に藤原道長が記した日記『御堂関白記』や藤原行成の『権記』には、こうした託宣者の記録は見当たらない。

まず、これらの記録より窺える託宣主についてだが、一方は北野天神をはじめとし、春日大明神、伊勢大神など当時大きな影響力を持った大神々であり、もう一方は生前不遇な人物、行動異常がみられた藤原道兼や冷泉院等、様々な怨（御）霊たちという二つに分類できる。神々が託宣主であることは当然といえるが、様々な怨（御）霊・邪気によるとされる託宣や仕業が、当時の社会に広く流布し影響を与えていたことがよく分かるものである。

次に託宣者についてだが、登場する託宣者は延べ十人以上になる。そのうち寛仁二年（一〇一八）四月二十日、藤原道兼の霊の託宣者が「人」とある他はすべて女性である。その内訳は①の皇太后（一条天皇皇后定子とその女房である藤原典侍（藤原道兼室）、②と④の藤原兼子（三条天皇皇后）と⑤の長和三年（一〇一四）十一月四日の藤原資平（実資養子）室、民部掌侍（みんぶないしのじょう）、女蔵人と宮廷女官たちが並ぶ。さらに長元四年（一〇三一）以降は伊勢の斎王の託宣が頻繁になる。『小右記』には加持や御修法は密教僧が、また、占いや禊は陰陽寮の安倍晴明が行っている記録はあるが、託宣者に関しては夢想以外男性による例は認められない。

表

No.	年	月 日	託宣主	託宣者	備 考
①	永延元年 (987)		北野天神	藤典侍 (皇太后定子寄託)	『百鍊抄』による
②	延暦四年 (993)	10. 14	藤原師輔	藤原城子	
③	長和元年 (1012)	6. 4	山王の王子	女人	
④	長和三年 (1014)	6. 27	伊勢大神 (斎宮)	藤原城子	
⑤	同上	11. 4	春日大明神	藤原資平室	
⑥	長和四年 (1015)	5. 2	冷泉院邪気	仕候女	御修法中
⑦	同上	5. 4	冷泉院邪気	多くの女房 (民部掌侍)	七壇御修法
⑧	同上	5. 7	賀静と藤原元方の霊	藤原資平室	律師の加持
⑨	同上	5. 22	高階成忠の霊	民部掌侍	
⑩	同上	6. 3	冷泉院邪気	女蔵人 (源中納言俊賢の人)	
⑪	寛仁二年 (1018)	4. 2	藤原道兼の霊	人 (特定されず)	五壇御修法中
⑫	長元四年 (1031)	7. 3	伊勢大神	伊勢斎王	
⑬	同上	8. 4	伊勢大神	伊勢斎王	

出典：『増補史料大成 別巻 小右記一 二 三』臨川書店、1968年
 ：『国史大系61 百鍊抄』臨川書店、1979年

『小右記』に記された託宣者の特徴を整理すると、前述のようにほぼ女性に特化され、女性の社会的位置も皇后、上級貴族の室、および宮廷の上臈女官がほとんどであり、市中での巫や「憑き女」といった下層の「口寄せ」を生業とする者の記録は見えない。これは著者の実資自身が上級貴族であり、当時の日記の性格上周辺事情の記録が主であるためともいえるが、実資の記録は世情に関する記録も少なくない。鋭い観察眼をもった実資が市中の興味深い世情話を見逃すとは考え難いが、少なくともこの時代の貴族間における託宣は、奈良時代や平安前期のように巫や禰宜といった呪術者や神職者によるものではなく、身近な高位の女性たちによるものへと変化していたと考えられる。

伊勢斎王・典侍による託宣については、先行研究によって当時の政治状況から一定明らかにされている。

早川庄八は「託宣の真のねらいが、神宮を粗略にし、敬神の心を失った「公家」「帝王」に対する批判ないし非難にあった」と結論づけている。^⑨村岡薫は、神人強訴、託宣事件の検討から、こうした権力闘争は神郡を中心とした支配体制の掌握にあったとしている。^⑩なお、西宮秀紀はこれら斎宮内侍による託宣は、祭主職をめぐる政治的手段に利用されたものであると解釈している。^⑪

以上の研究成果をまとめると、斎王託宣については諸説があるが、政治的意図にもとづく作為的なものであったことは間違いなく、内侍の託宣に関しても祭主職をめぐる闘争を背景にしたものであり、佐為性が強く疑われる。となれば、伊勢宮における託宣は偽装・演出で

あった可能性が極めて高い。

では、前半に論じた貴族の室や上臈女官などによる託宣も偽装や演出なのであろうか。室や上臈女官の託宣に関する先行研究は管見の限り見当たらず、事例毎の背景については十分な検証はできていない。したがって、中には何らかの意図をもつての偽装的な託宣があった可能性は充分ある。例えば、⑩の長和四年（一〇一五）六月三十日条の冷泉院の御霊が源中納言俊賢を推挙したが、託宣した女蔵人が源納言の人であったという話は正にその典型である。しかし、『小右記』の記録からは女性によるすべての託宣が偽装や演出であったとは言い難い。伊勢斎王や女蔵人の託宣が時代の後半にあることを鑑みるなら、以前において頻発に起きた女性の霊的な託宣現象を、自分たちの都合の良いように利用した行為であった、とも考えられる。

2 夢想による託宣

次に『小右記』に頻繁に記され、託宣の一部を担っていると思われる夢想について、意味することは何か、女性の託宣と何が違うのかについて見ていきたい。倉本一宏は、『小右記』には藤原実資の夢想の記事が一四七回記録されているとして、これらを宗教的な夢、人事の夢、政務と儀式、天皇と王権などに分類し分析している。そして実資は夢の宗教性を認識しつつ、宗教的な怖れにのみ包まれることなく、また、夢想を冷静に自分の都合のよいように利用もしている、と述べている。⁽¹²⁾すなわち夢想は宗教的要素を含みながら現実を照射させる現象の一つと捉えることができる。

夢想の一例が正暦四年（九九三）十月六日条である。内容は藤原道兼に、管丞相（菅原道真）に太政大臣を贈るべきだとする夢想があり、この旨を菅原輔正に話したところ、「託宣の趣旨は大相国（太政大臣の唐名）に昇ることを望んでおり、神異である」といった、とある。この記事から、夢想も神からの託宣と捉えられていること、かつ託宣者が男性であることを窺うことが出来る。『小右記』に記された夢想に関する多くの記事は、実資自身が直接神からの神意（異）を受けている。したがって、少なくとも平安中期においては、男性も神や怨（御）霊との交流が可能であり媒介者になり得る能力、あるいは体質を有していると認識されていたと理解される。

では、女性の託宣者と男性の託宣者はどこに相違があるのか。今まで見てきた『小右記』の記録から整理すると、女性の託宣の特徴は様々な状況下ではあるが、直接の言語をもつての託宣であるということである。翻って男性の直接言語による託宣は皆無である。この違いはなぜ、どのようにして生じたのであろうか。この問いに、日本のミコに女性が多い理由を解く大きな鍵があると考ええる。

三章 摂関政治と女性の立場

今章では、前章までの結果を受け、なぜ摂関政治下、特に道長時代において託宣者が直接言語による女性に特化されるようになったのか、政治の特徴と女性の置かれた状況から検証する。

1 道長時代の摂関政治

摂関政治とは、平安中期に藤原一族が天皇の外戚として摂政と関白の重責を独占して行った政治体制であり、藤原良房が始まりとされ、道長の父兼家によって摂関の地位が飛躍的に高められた。摂政とは幼帝を保輔し、天皇の大権である叙位・除目といった人事権と奏上文を天皇に代わって閲覧する権限（内覧）を有し、関白とは元服後の天皇を補佐する職掌をさし、天皇が行うことのすべてを把握することができた。¹³すなわち、摂政・関白は天皇の権限の多くを掌握し権勢を揮うことができたのである。

摂関政治の隆盛期は兼家の四男道長が兄たちの亡き後、娘たちを次々と入内させ、外戚として権勢を揮った時代であったことは周知であり、藤原実資の『小右記』が記された時期（再掲、天元五年（九八二）～長元五年（一〇三二）の部分が現存）と重なり合う。したがって、この時代に言語による託宣者が女性に特化されるのはなぜかを解明するには、摂関政治、特に道長時代における貴族女性、および宮廷における女性の在り様を検証することが肝要であると考ええる。

では、道長の摂関政治とはどのようなものであったのであろうか。当時の政権をめぐる貴族間の権力闘争は極めて熾烈であり、複雑な様相を呈し全容には言及し難い。したがってここでは道長が天皇との姻戚関係をどのように築き、権力を手中にしたかを中心に述べ、その上で道長の摂関政治が女性たちにどのような影響を与えたのかを見ていきたい。

道長の父兼家が三女栓子を円融天皇の後とし、誕生したのが一条天

皇である。道長は一条天皇に十二歳の長女彰子を女御として入内させる（長保元年（九九九））が、一条天皇にはすでに道長の長兄道隆の長女定子が入内しており、一条天皇の寵愛を受けていた。しかし道隆、道兼が没した後、公卿たちは女（娘）を次々と入内させる。また、彰子が女御となった同月に定子は敦康親王を出産するが、その後の長保二年（一〇〇〇）内親王出産後崩御する。¹⁴

道長にとつて、彰子が一条天皇の寵愛を受け親王を誕生させることが何よりも権勢への近道であり、そのために必要と考えたのが、一条天皇の教養・知性に相応しい女御として彰子を教育することであった。そしてその教育係として選ばれた一人が、既に『源氏物語』の作者として知られていた紫式部である。式部は彰子付きの女房として、彰子に一条天皇が得意とする漢文をはじめ多くの教養・知性を授ける役割を果たしたのである。¹⁵紫式部以外にも、王朝有数の歌人であった和泉式部や、同じく歌人で『栄花物語』正論の作者とされる赤染衛門など当時の女性文人の多くを彰子の教育係として女房に採用したのである。ちなみに、定子に仕えた女房が『枕草子』の著者として有名な清少納言である。道長は定子が深い教養から一条天皇の寵愛を受けた教訓を彰子に生かしたと考えられている。

このような女房たちによる教育の成果によつてか、彰子は一条天皇の寵愛を受けるようになり、寛弘五年（一〇〇八）第二皇子敦成（後一条天皇）を難産で出産する。その様子は『紫式部日記』に詳しく、国中の修験者や陰陽師達を集め邪氣（物の怪）調伏のため昼夜違わず加持祈禱をさせているが、邪気の中で一番恐れていたのは定子の物の

怪だったという。⁽¹⁶⁾ 悪霊を排し彰子は無事皇子を出産し、道長の外戚としての一步を踏み出すのである。

道長はその後、次女の妍子を三条天皇に、三女威子を後一条に、そして四女嬉子を後朱雀東宮に入内させる。三条天皇を出家させ、敦成親王を後一条天皇として立位し、外祖父として摂政となり大権を掌握するのである。『小右記』寛仁二年十月十六日条には、女御となった三女威子が中宮に立后し、儀式後の宴の様子が詳述されている。そこで詠われたのが「此世をば我世とぞ思ふ望月の虧たる事も無しと思えば」であり、道長時代極みの象徴とされるのである。

以上が、道長が摂関政治の隆盛を築く過程の概要であるが、道長の執った女性をめぐる方策の特徴の一つは、自分の女を強引な手立てをもって立后したことである。託宣者に関わる女性に一条皇后定子と三条天皇皇后藤原城子（藤原済時女）がいるが、定子は彰子立后のため手段を択ばない道長によって、出産のため私邸に移る時の妨害など嫌がらせを受けている。城子についても、道長は次女妍子を三条天皇に入内させると、城子立后の日に妍子を内裏に参入させ数日にわたり饗宴を開き、そのために立后の儀の公卿の参加者は道長を恐れ四名にすぎなかったという。⁽¹⁷⁾

もう一つは、わが女の後仕える女房に有能な女性たちを集めたばかりでなく、摂関政治遂行にあたっての宮廷対策として、後宮の女官・女房たちの存立形態を変容させたのではないかということである。次節ではこうした道長をめぐる女性たちの状況について検討する。

2 後宮組織の変容と女性の問題

朝廷における女性たちは後宮と呼ばれる空間に集住し、古代においてはその身分、職掌は「大宝律令」により規定されたものであった。

まず、天皇の後（本稿では后を天皇の配偶者の総称とする）は古代より摂関期、道長時代にかけてどのように変化・変容したのであるか。

淳和天皇により「養老令」の解釈を撰述された「令義解」⁽¹⁸⁾、後宮職員令第三には、天皇の正室である皇后以外の后は次のように規定されている。

后二員	四品以上
夫人三員	三位以上
嬪四員	五位以上

これは皇后が特別の存在であり、后以降は職員としての位置付けであったことを意味しているが、このような律令制での后体制は、八世紀末から九世紀にかけて女御、更衣にとって代われ姿を消しているという。⁽¹⁹⁾ ではなぜ、律令制における后体制が姿を消したのであるか。それは、皇后はもとより后、夫人の身分規定によるものと考えられる。後の「四品以上」とは「親王以上」を意味し、夫人の「三位以上」は皇族であることを規定している。八世紀末から九世紀にかけては摂関政治の前史として藤原鎌足や不比等が娘を天皇に入内させるようになっていく。こうした動きは「葉子の变」（八一〇）で権力を掌握した藤原冬嗣に受け継がれ、娘順子を仁明天皇に入内させている。そして摂関政治の始まりとされる冬嗣の子、良房へと続くのである。

すなわち律令制の後体制の消滅は、皇族でない貴族たちの娘を入内させるために都合の良いよう、女御、更衣といった后名を作り出したことによると考えられる。さらに、円融期（九六九～九八四）前後より尚侍が後の称号の一つとなり、対して低位の後の称号であった更衣が減退し、后候補は上級貴族に限定されることとなる。⁽²⁰⁾

こうした后資格の変容は、藤原氏家をはじめとする上級貴族間の女入内への熾烈な争いを喚起させ、道長時代において最も激しいかたちで現れているといえよう。『小右記』の筆者藤原実資も女子の誕生を切に願っていたことは記録より明らかであり、当時の貴族の権力掌握は女の入内、そして親王誕生に大きく左右されたことは言うまでもない。

道長時代に道長の女以外に后となった女性、特に親が亡くなるなど有力な後見人を失った場合の苦悩は、既述した道長による定子への嫌がらせに代表されるように、「物の怪」として彰子の出産に影響を与えるのではないかと、人々怯えさせる程のものであった。

次に託宣者として登場している典侍や掌侍、女藏人などの女官、女房について、古代より摂関期にはどのように変容したかを見てみたい。

「令義解」には后規定に次いで、「宮人」職員として内侍司の規定が載っている。

宮人ノ謂。婦人仕官者之惣號成。職員

内侍司 尚侍二人。掌供奉 常侍奏請 宣伝。檢校女孺 典侍
四人。掌侍四人。女孺一百人。

令制下では天皇に供奉する後宮十二司があり、婦人より構成され宮人と号され、その第一に位置するのが内侍司であった。尚侍、典侍、掌侍、女孺によって組織され、筆頭の尚侍の最も重要な職掌は規定にあるように常に天皇に侍し、奉請と宣伝を行う事であり、天皇の意思伝達ルートとして位置付けられ、典侍、掌侍はこれを補佐する役割であった。⁽²²⁾

しかしながら、八世紀から九世紀にかけて律令女官制度は大きな転換を遂げ、男性官人の内裏仕候が確立し宮人の独自性は薄れ「女官」と称される。そして、十世紀には十二司は解体され、職掌には違いがあったが、男房（藏人・殿上人）と共に女房が天皇に奉仕し、女房組織は上臈（乳母・典侍）六名、中臈（掌侍六名・命婦十二名）、下臈（女藏人六名）からなり、天皇の日常生活に奉仕し、奉仕時間以外は局と称されるプライベート空間で過ごしたようだ。⁽²³⁾ また、女房の詰所である台盤所には男房やその他特定の男性も立ち入ることができ、局にも可能であったことが紫式部日記でも明らかにしている。

尚侍が后候補になったことは既に述べたが、内侍司の役割である「(天皇に) 常侍、奏晴 (天皇に貴族たちの言葉を伝える)、宣伝 (天皇の言葉を公卿や殿上人に伝える)」は典侍や掌侍に受け継がれ、『権記』長徳四年正月七日条、彼女たちは天皇に最も近侍した秘書官として重要な存在となったのである。そのため典侍や掌侍の出身の多くは后候補を輩出できない未流の藤原氏をはじめ源、橘、高階氏などであり、一定の教養を身に付けた中級貴族の妻子たちであった。

道長は天皇および皇后との意思伝達を円滑にし、かつ権力のさらな

る強化のため「奏事」、すなわち太政官における政務の段階を省き内覧の役割を重視した政務方式を行った。⁽²⁴⁾ この政務方式においては、「奏晴」「宣伝」の役割を担う女房の位置付けは重く、道長は女叙位にも積極的に関与することとなる（『小右記』長和五年二月十四日条昨日於摂政直廬有女叙位⁽²⁵⁾）。

道長は婚姻を媒介としない中級貴族の女性を女房として取り込むことにより、政務を円滑にするとともに道長を中心とする権力構造を強固にしたといえる。⁽²⁶⁾

また、道長の女たちが后となった天皇には、典侍や掌侍といった天皇に最も近侍し妾となる確率の高い女房たちとの関係が一切見られない。尚侍が天皇の後候補となったのは、こうした近侍性が要因と考えられる。これは前後の天皇たちが彼女たちを妾とした点と大きな相違があり、ここにも道長の強権による女性性支配をみることができる。こうした道長の女房支配は前述にあるように人事にも関与し、女房たちにとって、政務上はもとより天皇と道長との個人的関係においても、葛藤と苦悩があつたとみるのは自然であろう。

宮廷に集住する女房には既に述べたように、后に私的に仕候する多数の女房がいたことが知られるが、彼女たちによって宮廷は多くの殿上人の参加する華やかな文化サロンとして栄えた。式部が日記に書いているように、道長からの誘惑など女房と殿上人との恋愛機会も多く、恋のさや当て、ジェラシー、そしてイジメをなどが横行する世界でもあつた。⁽²⁷⁾

道長時代は宮廷女官・女房、后女房たちの役割、存在が大きく花開

いた時代であつたが、一方では女性の生む性と権力が密接に結びつき、また、女性の豊かな感性や能力が摂関政治形態を基底とし、道長という強権者の権力拡大のために「利用」された時代でもあつたといえる。

では、最後に宮廷以外の婚姻関係をめぐっての女性はどうであつたのであろうか。

道長には正妻の倫子と、以前より婚姻関係にあつた源明子以外に四人の妻がいた。実資にも四人以上の妻が存在している。紫式部の夫、藤原宣孝には式部が結婚した時にはすでに先妻がいて、式部は少なくとも第四の妻であり、同居していたかどうかは不明である。⁽²⁸⁾ 当時の貴族階級の婚姻制度は一夫多妻制であり、摂関政治当初においては、夫が妻の家に通う「妻問婚」が通常であり、明確な正妻の位置付けに乏しく妻の実家の身分や経済状況によって妻の位置が決まったよう⁽²⁹⁾だ。しかしながら、道長は正妻の源倫子と最初は別居であつたが後に同居したように、婚姻制度に変化をもたらす時期であつたと考えられる。⁽²⁹⁾

服藤早苗は正妻制度の確立を示す「北政所」について、「十一世紀なかころになると、摂関の正妻を北政所と呼称するようになり、十一世紀末には固定した⁽³⁰⁾」と述べている。道長の正妻との同居（永年元年（九八七）に婚姻）から考えるなら、道長隆盛時代前後頃より夫と正妻の同居が始まり、徐々に他の貴族層にも影響を与え、正妻とそうでない妻との扱いは大きく違い、⁽³¹⁾ 女性間において正妻をめぐる葛藤が強まった時代であつたといえる。

以上、道長摂関政治期における女性の在り様を后、女官・女房、そ

して簡単ではあるが貴族層の結婚制度における正妻について検討した。結果、当時の女性はどの立場においても不安や葛藤・苦悩を受けざるを得ない状況であったと考える。庶民層についての言及はできなかったが、今後の課題としたい。

四章 精神医学からの検討

では、なぜこの時代に高位の女性たちが託宣者へと変化したのであろうか。検討する上での一つの資料として、御修法時における女性たちの状況について提示する。

『小右記』 長和四年五月二日条・五月四日条の記録が次である。

二日…頭中将云、去夜被始七壇御修法、七佛薬師法、山座主壇西對二對、慶命、文慶、隆空、三壇西對、明救、蓮海、二壇御堂、心譽、西中門南廊

主上被仰曰、昨日申刻供御湯殿、其後御心地極惱御之間、候御前乃女氣色相設仰見但入云、有御讀經御修法靈驗者、其後御心復尋常、又如人復例、未知何、又仰云、壇乃御修法、律師御加持間、候御前乃女、民部掌侍、両手振動、己似邪氣、昨御目頗宜、今日猶如例不快者

四日…主上御目、冷泉院御邪氣所為云々、託女房、顯露多所申、々事云々、移人乃間御目明云々、

概要は、五月一日に七壇御修法（七佛薬師法）を始めた。主上（三条天皇）が仰せられるには、「御湯殿に供され、その後御心地不快であり、仕候した女が天井を見入って言うには、『御読経、御修法は靈

驗があつた』と。その後気分も良くなり、女も元に戻ったが、未だ何であつたかわからない」、又おっしゃるには「壇の御修法、律師御加持の間、仕候の女（民部掌侍）は両手が振動させた。すでに邪氣に似ていた。」と。四日には、天皇の眼疾は冷泉院の邪気によるものであることが女房を託して露顯した云々。

当時、三条天皇は道長との関係悪化に疲弊し、心身や眼疾の病悩に苦しみ、そのために七壇御修法（七佛薬師法）を受けた時の記録である。七佛薬師法とは、天台宗の法の一つであり七仏薬師を本尊として、僧の読経による息災・増益を祈るものであり、『小右記』の記録は当時の三条天皇が御修法を頼りとする状況をリアルに表しているといえよう。

ここで注目されるのは、天皇に仕候した女性の様相である。御湯殿に仕候した女性は、天井を凝視し意識を失った状態で「御読経、御修法は靈驗があつた」と告げ、その後意識が元に戻ったという。また、天皇がおっしゃるには「壇の御修法、律師が御加持を施行している間、仕候の女（民部掌侍）が手を振動させていた」。さらに、女房の託宣により眼疾は冷泉院の邪気の所為であることが分かったのである。ここに登場する女性は同一であるかどうかは判別しがたいが、天皇に仕候する上臈女官であることは間違いなく、彼女（あるいは彼女たち）は密教僧による御加持、御修法により、なんらかの精神的、肉体的な異常、変化をきたしたといえる。第二章の表から、他の例においても女性が加持祈禱時に託宣を行う場合が多いことがわかる。

なぜ上臈女官がこのような状態になり、「託宣」を述べ、邪気の存

在を知らしめる役割を担うのであろうか。こうした「異常様態」は、はたして女性のもつ「特性」から発せられたものであろうか。

女性の「異常行動」については、世界的に心理学および精神医学からのアプローチがなされたことは周知であるが、日本における精神医学においても多数の優れた研究成果が見られる。その一つが森田正馬による「祈禱性精神病」という概念であり、「加持祈禱あるいはそれに類似した事情から人格変換、宗教妄想、憑依妄想などを呈する」⁽³²⁾としている。

また、精神科医である浅野弘敦等は、中年女性の妄想に着眼し症例研究発表を随時行っている。その中における一つ「中年女性の幻覚妄想状態（第3報）——憑依体験⁽³³⁾——」は、三人の中年女性の憑依体験症例報告であるが、「考察」の「窮地からの脱出」は極めて興味深く、平安期の女性がなぜ「託宣者」となり得た（ならざるを得ない）のかを考察するにあたり重要な内容を含んでいると考える。

内容は精神医学の識者数人の憑依についての研究成果をまとめたものであるが、その中において①昼田「巫病、あるいは宗教体験の獲得も、窮地におちいった人間が示す、一つの防衛反応である」。②新福「困難な現実からの逃避の傾向」。③佐藤「憑依の生成の契機として、現実社会における困難、不安、葛藤からの脱出願望があげられる」とした見解が提示されている。⁽³⁴⁾これらの見解から鑑みるなら、前述の加持祈禱時に示した女性たちの「異常な様態」は憑依状態であり、道長撰関期の貴族女性の窮地、困難、不安、葛藤からの防衛反応、脱出願望の表象であり、多くの場面において出現していたと見てよいのでは

ないだろうか。

以上、精神医学の視点から道長期における女性の託宣状態について検証を試みた。十全な検証には至っていないが、私見の域を出るものではなく今後の追究が必要であるが、こうした女性による憑依現象の典型が、前述の加持祈禱時の民部典侍にあるような状態であり、あたかも神や霊が女房に憑依し言葉を発したとみなされたのではないだろうか。そして、女性の苦難が酷かった道長撰関期前後に最も多く現れ、直接言語による託宣は女性によるものであるとした認識、観念が貴族層に定着、一般化したと思われる。二章に呈した伊勢斎王などの託宣の偽装はこうした認識の定着を利用した行為であったといえる。

これまでの本論の論旨の到達から、「ミコ女性論」を考えるなら、精神医学の面からは、柳田の言う女性の「いち早く異常心理の作用を示す」特殊能力は、女性の防衛反応、自己保身能力の優位性としてあり、確かに女性をミコに導いた一因と捉えることができる。しかし弱点は、女性の生きざまを神話や伝承に重点を置き、社会史からの観点が脆弱であり、始祖を古代とし、女性が自己防衛をしざるを得ない社会背景に、十分眼を向けられていないことである。

日本のミコが圧倒的に女性を優位とするのは、道長時代以降、直接言語託宣が女性の「特権・特質」とした社会的概念としてひろく認知され、この概念を基底として日本に多くの女性託宣者（ミコ）が誕生し、結果として日本の「ミコ」は女性が多数を占めることとなったと考える。なお、撰関時代には「ミコ」という語は未だ現れていない。

まとめ

本稿は柳田國男等の「ミコ女性論」について、歴史学と精神医学から検証を試みたものであり、その結果次の点が明らかになったと考える。

まず、いつ頃からミコの主たる職掌「託宣」が女性優位となったかを「説話集」より探り出し、その結果摂関期に女性の託宣者が際立つことが推測された。そこで摂関政治隆盛期の公卿藤原実資の日記『小右記』に記された「託宣者」を抽出したところ、ほぼ女性に特化されていることが明らかになった。託宣者の特徴は①天皇の後、後宮の上臈女官（女房）、貴族の室など上層階級出身の女性であること。②女性の託宣は直接言語によるものである。夢想では男性による託宣が見られことから、この点が女性を特別に託宣者（ミコ）とした一つの鍵があると見る。③加持祈禱時に託宣する場面が多く見られ、また手の振るえや一点凝視などの身体の異常を呈することがある。の三点が挙げられる。

次に、こうした託宣者の特徴を受け、女性の生活、社会環境を探るべき、摂関政治の隆盛期で『小右記』の記録時期と一致する藤原道長による政策を吟味した。結果、次の点を明らかにした。①道長は天皇・東宮の後として我女四人を入内させ権力を手中にしたが、その方法は極めて強引であり、対抗する后たちを酷く傷つけるものであった。②権力拡大のため、後宮の女官・女房たちの人事、職域にも介入し支配を強め、後宮で働く女性たちの苦悩と矛盾を深めたと推測され

る。③正妻をめぐる葛藤もこれまでにない激しい時代であった。したがって、道長政権下における貴族女性たちは様々な場面において、精神的に追い詰められる状況が多くあったといえる。

最後に、以上の女性たちの置かれた状況や託宣時の特徴（加持祈禱時に多い）について、精神医学からの検証を試みた。結果、摂関期における女性たちの託宣行為は、不安や苦難、葛藤からの避難、脱出行動である憑依現象の一つであることが明らかになった。また、「ミコ女性論」は社会史視点からの弱点はあるが、女性の防衛反応、自己保身能力を女性の特長能力とし、女性ミコ優勢を論じており評価できる面もあることがわかった。

以上より、道長摂関社会において、女性による託宣（憑依現象）場面が多く現出し、「直接言語による託宣者は女性」とした認識が一般化したと推測される。そして、こうした認識がその後、託宣者（ミコ）＝女性とした社会概念につながり、日本のミコは女性が多数を占める状況を醸成したと考える。

本稿は全体として、精緻な検証が十全になされているとは言えず、仮説、私見の域をでない点も多いと考える。今後の検証、追究が求められるものである。

〔注〕

（1）M・エリアーデ『シャーマニズム』堀一郎訳、冬樹社、一九七四年。
I・M・ルイス『エクスタシーの人類学』平沼孝之訳、法政大学出版局、一九八五年。

（2）柳田國男「妹の力」（『定本 柳田國男集 第九巻』筑摩書房、一九七

七年）に巫女に女性が多い理由の一つに「その感動し易い習性が、事件ある毎に群衆の中に於いて、いち早く異常心理の作用を示し、不思議を語り得た点に在る」と述べている。

- (3) 義江明子『日本古代の祭祀と女性』吉川弘文館、一九九六年。溝口睦子（「記紀に見える女性像——巫女・女酋・治工・戦士——」前近代女性史研究会編『家族と女性の歴史』古代・中世、吉川弘文館、一九九九年）。
- (4) 堀岡喜美子「祭祀神幸と巫女の現出——「巫女」とは何か」をめぐっての一考」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第四十八号、二〇二〇年三月。
- (5) 『新編日本古典文学全集三十八 今昔物語集』（小学館、二〇〇二年）より引用。
- (6) 『新日本古典文学大系四一 古事談・続古事談』、岩波書店、二〇〇五年。
- (7) 『日本古典文学大系 古今著文集』（岩波書店、一九七四年（第八刷）の「解説」による。
- (8) 出典は前掲7『古今著文集』。
- (9) 早川庄八「〈附論二〉長元四年の斎王の託宣事件をめぐって」『日本古代官僚制の研究』岩波書店、一九八六年。
- (10) 村岡薫「伊勢神宮における神人強訴の一考察」、『中世の政治的社会と民衆像』三一書房、一九七六年。
- (11) 西宮秀紀『伊勢神宮と斎宮』岩波書店、二〇一〇年。
- (12) 倉本一宏『平安貴族の夢分析』吉川弘文館、二〇〇八年。
- (13) 古瀬奈津子『撰関政治』（岩波書店、二〇一一年）八—一〇頁。
- (14) 前掲(13) 古瀬著書、山本淳子『私が源氏物語を書いたわけ』（角川学芸出版、二〇一一年）、木村朗子『女たちの平安宮廷』（講談社、二〇一五年）等参照。
- (15) 前掲(14) 山本著書、一一九頁。
- (16) 前掲(14) 山本著書、一一二—一二五頁。
- (17) この件に関しては『小右記』長保元年八月九日条に詳しい。
- (18) 『新訂増補国史大系 令義解』吉川弘文館、二〇〇三年（一九三九年初発）。
- (19) 伊集院葉子『日本古代女官の研究』（吉川弘文館、二〇一六年）一一〇頁。
- (20) 吉川真司「平安時代における女房の存在形態」、『律令官僚制の研究』塙書房、一九九八年）四三〇頁。
- (21) 前掲(12) 倉本著書、一八七—一八八頁。
- (22) 前掲(19) 伊集院著書、一一三頁。
- (23) 前掲(20) 吉川著書、四二八頁。
- (24) 前掲(13) 古瀬著書、四十六頁。
- (25) 『小右記』長和五年二月十四日条に「昨日於撰政直蘆女叙位」とあり、道長が直蘆に直接赴いて女房の人事を行っている。
- (26) 前掲(14) 木村著書、二一二頁。
- (27) 前掲(14) 山本著書、九十七頁など参照。
- (28) 前掲(14) 山本著書、五十三頁。
- (29) 前掲(13) 古瀬著書、三十六頁。
- (30) 服藤早苗『平安朝の家と女性—北政所の成立』（平凡社、一九九七年）六十一頁。
- (31) 前掲(13) 古瀬著書、三十五頁。正妻倫子と次妻明子の子息たちの間には、社会的地位に大きな格差が生じている。
- (32) 森田正馬「余の所謂祈禱性精神病に就いて」『神経学雑誌』14、286-287、一九一五年。
- (33) 浅野弘毅他「中年女性の幻覚妄想状態（第3報）——憑依体験——」『仙台市立病院医誌』16、25—31、一九九六年。
- (34) 昼田源四郎「窮地」と宗教体験、イマージ3（2）、72—79、一九九二年。新福尚武「山陰地方の狐憑きについて」『精神医学』1、83—90、一九五九年。佐藤親次「憑きもの」現代精神医学大系25（中山書店、東京、一九八一年）七十七頁。なお、以上の文献、および前掲(32) 森田論文は、前掲(33)の浅野等の論文から転載であり、入手、閲覧が困難なため未読である。

(ほりおか きみこ 文学研究科日本史学専攻博士課程／修了)

(指導教員・八木 透 教授)

二〇二〇年九月三十日受理